

Title	第十九世紀の文明史及び文明史家 (上)
Sub Title	
Author	間崎, 万里
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.9 (1920. 9) ,p.1264(80)- 1277(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200901-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ものはその所爲に對して報償を受くることを得べしと雖も、それ以上を求む可からず。然るに正に貸與せる丈けのものを返附せらるゝときは衡平並に正義の上より見て彼れは既に報償を得たるものなり。故に彼れにして其實質の消費以外に其用なき一物の利益權に對して、是れより多くを求むるは、これ實在せざる或物に對して代價を求むるものにして、此人の要求は不當なり。

反對説の六に對する答、銀器の主なる用途は消費にあらず、從て、その所有權を保持しながら其使用を賣ることは正當なり。反之銀貨の主なる用途は交換の爲め之を投棄するに在り。從て其使用を賣り同時に併せて其貸附額の返還を豫期するは正當ならず。但し銀器も第二次に於ては之を交換の用に供することを得べく斯る用は之を賣るも正當なることを注意せざる可からず。同様に銀貨にも亦例へば之を展覽に供し、

或は之を擔保として寄託するが如き第二次の用途あるべし。貨幣の此種の用を賣るは正當なり。反對説の七に對する答、利息を支拂ふものは單に任意に之を爲すにあらず、其所有者が無利息にて貸すことを肯せざる貨幣を借らざる可からざる必要に迫りて之を爲すなり。

註一、英譯獨逸譯共に詩篇第十八篇八節に作れども指定の節には此一句なし。恐らくは誤記ならんか。
註二、英譯獨逸譯共に第十四篇五節に作れども引用の句は第十五篇五節にあり。故に改めたり。

第十九世紀の文明史及び文明史家(上)

間 崎 万 里

茲に述べようとするのは、Bernheim, Fucker と並び稱せられてゐる G. P. Gooch 教授の著 History and Historians

in the 19th. Century, 1913. 中の一章より抄譯せるものであつて、文明史の研究に志す初學者の一助ともならば、紹介者の満足する所である。彼は次の如くに既に記してある。

歴史の範圍は漸次に擴張せられて、遂に人文生活のあらゆる方面を網羅することとなつた。最早や今日、シーローと共に歴史は國家の傳記なりとか、フリーマンと共に歴史は過去の政治に過ぎずなどと、主張せんとする者はないであらう。諸國民の發達、偉人の功績、黨派の消長などは、依然として史家の興味をそゝる主題の中に數へられてはゐるが、併し自然の影響や、經濟的要素の勢力や、思想の起源と變化や、科學と藝術、宗教と哲學、文學と法律などの貢獻や、生活の物質的條件や、民衆の運命などといふが如き問題は、今や少からず史家の注意を求むることゝなつた。故に歴史家は人生の全般を十分によく觀察しなければならぬ。

『文明史』とは、政治的ならざる文化の方面に與へられた名である。この流派の開祖、ヴォルテアの作である『ルイ十四世時代』は、國民の全生活が描寫された書物の初、又その『風習論』は、實際の文明史の初である。ヴォルテアの關いた道は、他の史家の追ふ所となつた。ヴィンケルマンは上古の藝術の歴史をば希臘思想の發露であるとし、ヘーレンは商業の發展に研究を進め、ユスツス・メーザーは農民に着目して經濟組織と政治組織との間に存する關係を明にした。ヘルダー一派の主義主義者は民族精神に注意を拂ひ、シュロツサーやギゾーの諸著は長足の進歩を遂げた。然るに尙ほ第十九世紀の前葉に於ては、文明史の眞價は殆ど認められず、ワハスムートとコルプの企てになつた、文明の概説は連絡のない細事の集成に止つてゐた。

一八四八年の革命は、第四階級に、政治家と史家の注意を向けしめたが、この事變こそは、文明史家がその先覺者として、且つ模範として推賞する三大巨頭の一人なるリールの畢生の事業を主として決定したるものである。ブルクハルトとフライタハと並び稱せられてゐるリールは、決して傑作と見るべきものを残さなうだが併し。彼は教授として作家として將た巡回講師として、歴史の社會學の建設に多年の生涯を捧げ、且つ獨逸民族の生活に關して夥多の著述をなした。ナッソー公の城番頭であつた彼の父は彼を連れて巡察した。クグラードとフィッシャーの講義は彼に藝術の愛すべきを教へ、アルントとダールマンは彼の歴史に對する趣味を湧かしめた。民衆の創造的能力を煽りたる主想派の運動、並にヤコブ・グリュムの思想に動かされて急速の發展を遂げたる獨逸國學の研究は、相合してこ

のライオンランドの青年の思想の傾向を形造り、アウグスブルヒの住居は獨逸往古の市民生活に對しての興味を強めた。一八五四年彼は滿三十一才のとき、學識を以て聞ゆるマクシミリアン二世の御召によつてミュンヘンに赴き、名譽ある客人として隔てなき款待を受け、彼の講義は熱心なる多數の聽講者を引き付けた。アクトン卿もこの講筵に侍したる一人であつた、そして後年當時の印象を記述して、一人の生ける人が社會を動かす力と之を止むる力を併有してゐる。三十餘年の昔、ブルクハルトやフリードレンダール、バックルやシモンズに先立つて、文明史についての講義を始め、多幸なる聽講者に向ひて、文書の上に存する何れにもまして、深遠なる新史觀を開示した」といつてゐる。

彼はいふ、民族研究は獨立の一科學である、前世紀の未完の創造であると、併し、その思想

は兎も角、材料は歴史と共に古い。ホーマーと舊約全書は豊富なる資料に充ち、人類誌について理解あるヘロドツスは、歴史の父であると共に民族研究の父である。タキツスはその『獨逸志』に於て、初めて系統的に人と國との關係を説いた。夫より、社會史の眞の開祖であるユスツス・メイザーに至るまで、更に進歩を見なかつた。その『オスナブリック史』は民衆の權利を説いた最初の書である。次の半世紀は歴史的社會學に種々の寄與がなされた。即ちアヘンヅァールの統計學の創始、アダム・スミスの經濟生活の研究、カール・リッターの地理學の主旨、サヴィニの法制史、就中グリュム兄弟の神話及び言語學に關する著述などは是である。是等を基礎として、

有することを、彼の回遊よりして學び得たと述べてゐる。從來裝飾的の背景を添ゆるに止まつてゐた人民は、今や畫中の主要人物となつた。而して歴史家にも將た政治家にも重要な仕事は、彼等の發達の法則を理解することである。就中その最も根本的なるは自然である。彼は氣候と地味の差及び山野の別は種々の習慣を導くものであるとし、獨逸を三部に分つた。都市は速に世界的に推移するも、田園の生活は政府の行動或は思想の滲入によるよりも、自然力の影響によつて決するのである。自然が社會及び經濟に及ぼす作用についての分析は非常に暗示に富んでゐる。

リールの主著『獨逸民族文化史』は作られたものである。彼は第一卷「國土と人民」の序文に於て、典型と性格は定つた歴史的並に自然的の起源を

リールは自然の條件を研究して、歴史的社會學の基礎を作り、第二卷に於て社會の法則を造り上げんとしてゐる。凡そ社會的生活には二個の大なる勢力が存し、之が更に二分せらる。第

一の惰性、即ち社會的の保守主義は農民の最も有力に代表する所、併しこは民主的の保守主義である。持久性即ち第二の惰性は貴族の階級である。シュタインは流石に其の階級の壓迫の特権を除去することは其の社會的及び政治的の勢力を強め且つ持續することであると認めてゐる。第二の根本的勢力は元來都市に働く運動の力である。持續の力と運動の力の間に於て、平衡を維持して行く事の如何によつて、國家の健康と幸福とが定まつて來るのである。リールは普遍的のものより特殊のものに研究をすゝめて、第三卷に於ては社會の根柢たる『家族』を論じ、『國家と社會に、變動を生ずれば生ずる丈け、益家族に執着する』。家族は兩性間に於ける自然の分業を基礎としてゐる、而して文化の發達は益兩者の分化を強めると。彼は個々の家族に特性を與へてゐる傳統的又は其他の力に注意を促し、

この家族の個性を保存するやう、其の國人に切望してゐる。

宮廷伯領に關する著書は、『文化史』中に推賞せる方法を細説せる範例であり、又團體心理學に寄與するつもりで企てられたものである。彼は又國王の徳憑を受けて取掛つた、アウグスブルヒの調査に於て、同様の試をなしたが、之は往々彼の傑作であると稱せられてゐる。彼は到る處に自然と人との間に於ける有機的關係を見出した。其の方法は王命によつて、彼自ら編纂せる『巴威の國土と人民』に關する、協同的大著述に應用せられ、又彼の主宰せるミュンヘンの國民博物館の建設にも採用せられた。文明史に對する彼の功績は、藝術に重きを置ける點であつた。音樂家たり其の批評家たる彼は、音樂が詩又は科學と同じく、大切なる文化の要素なることと、音樂の形式の進化は、獨逸情操史上の諸

問題を解決したと主張し、更に寺院建築及び其他過去の記念物は、其の國土と人民の例示的歴史であるとした。彼は史籍の外に、一千年の獨逸の生活を通査するの目的を以て、夥多の物語を編述し、『各部は小なる浮世繪たるに止まるも全體は一つの大きな歴史的パノラマをなす』と。この物語はフライタハの創作に比して有機的の連絡なく、且つ歴史的ではないが、過去の思想と周圍を明かにするには大なる價值があつた。

自然と人との關係を鋭く洞察したる彼は、他の要素即ち國家に對して、比較的冷淡であつた。彼はグリムと同じく、個性よりも典型を好んだ。彼は博識の人ではなく、先づ生ける人々を見、然る後に初めて印刷された言葉を見た。彼は中世について殆ど知る所なく、歴史家中での最も學究的ならざるものであつた。彼の功績は人民の生活に盡きぬ興味を力説し、且つ如何なる勢

力によつて生活が決定せられるか、如何なる通路を取つて之が表現せらるゝかを穿鑿せる點である。ゴトハイムは時人ガリールの描寫を歓迎し、觀察と發見をなすべく遠足に出掛けたる有様を述べてゐる。リールは文明史をば眞の歴史哲學であると述べて、そのために至高の要求をなし、又政治と文化の反目を認むることを拒み、『對立主義は消え去つて、文明史は國家や教會や藝術や其他の部門を枝葉とする幹となるであらう』と。

リールと同じく感情強き獨逸人、グスターフ・フライタハは、獨逸民族の歴史的生活を編み出さんと企てたることに於て、更に一層の人氣を博した。スラーヴ人の世界と接近せることが、人種的自覺を強めたるシレジアの地に生れた彼は、早くより獨逸の文學と歴史に深く興味を感じ、ラハマンの中世言語學に引き入れられて、

獨逸戲詩の起源に關する論文を書いて博士の學位を得た。是等の初期の研究は彼に人民の眞髓を傳へ、一八四八年の事變は彼を政治に赴かしめた。彼は『グレンツポルテン』紙を買収してライプチヒに移り、プロイセンを覇主と仰ぐ獨逸統一の機關紙とした。爾來彼は政治と歴史を結び付けた。彼の『獨逸史より』が一八五二年より發表さるゝに至つたのは、本紙上に於てあつた。後年彼は自傳の中に記して曰く、『政治的事件の裏に暗流となつて漂へる人民の生活は常に予の非常なる注意を引いた』。彼は無數の小冊子、引札、版畫、其他の珍品を蒐集した。『予が生活の様式と習慣に關して諸般の知識を得たのは、是等の小本に負へるのである。之について大冊は少しもいふ所なかりし』と。

獨逸人民の古今の生活を五卷の中に通査せる、フライタハの『獨逸の過去の面影』は、専門的

史家の作品ならざるも、第一流の價值がある。或る範圍、殊に後半に於て根本的研究の上に築かれたる本書は、一般公衆よりも將た又學者よりも、盛に賞讃せられた。本書は同時に愛國者の著述でもあり、科學者の研究でもあり、又藝術家の作品でもあつた。シェラーは『こは吾人の持てる最上の獨逸史である。若し之が過言であるとすれば、吾人は良獨逸史より吾人の望む所のものを、其他の何れよりも多く其中に見出す』といひ、エリッヒ・シュミットは彼を獨逸國學者と歴史家の筆頭に置いた。是等の非常なる讚辭は肯綮を得てゐる、今日と雖も本書には匹敵するものがない。彼は人民に重きを置いて、二千年の距離に統一を與へ、當代の證據を拔萃して、過去を眼前に髣髴せしめた。然も彼は過去を理想化するの誘惑を避け、獨逸人は『古の盛時』を求むるも得ず、過去の生活は何れの時期に於て

も、今日あるよりも貧乏にして暮し易からず、殆ど安泰も權利も輿論といふべきものもなく、殊に個人の精神は自由に乏しかつたと。彼は民衆のために個人を忘るゝの危険に陥らず、曾て文明は屢々古著屋のやうに誰も著手のない衣服の如くされてゐるといひ、中心人物の價値を十分に了解してゐた。彼はカール大帝に於て初めて印象強き人物に出遭つた。少しく降つては『眞の意味にて最後の獨逸皇帝』と見るべきバルバロッサは愛慕の念を以て描寫せられた。本書全體の中心はルーテルに集中せられてゐる、そしてこの改革者の描寫は新敎國獨逸の大切なる寶物となつた。殆ど之に譲らざる描寫はフリードリヒ大王の事業及び性格の詳細なる研究である。是等の人物の描寫が本書の最も人氣を蒐むる部分であるならば、三十年戦争のそれは又最も珍重すべき部分である。彼は軍隊と陣營生活、村

落と都市、迷信と罪惡、泥棒と警官を寫した。一世紀獨逸を退歩させた本戰役の、道徳上及び物質上に於ける不幸を、かく迄強く示せる史家はない。

本書は獨逸の統一の緒についた一八六六年に完結を告げた。彼は記して、『この年、獨逸人は多數のものに民族の大移動又は十字軍の如くに縁遠くなれるもの、即ち國家を取り返した。獨逸人たる事が喜となつた。やがて諸國民間に大なる名譽とされるであらう』と。バーデン國の大臣であつて且つ獨逸統一の一方の勇將なる、彼の友人『マチャー』の傳記は、この話の別の形にて繼續せるものと見られる。然し獨逸人民の生活の解釋者としての彼の事業は、之を以て完成されなかつた。彼は自傳の中に、彼が皇太子に隨行せる一八七〇年の戰役が小説『祖先』の中に活躍せる幻想を生ずるに至りし有様を説いてゐる。

獨逸民族の全歴史は彼の眼前に地圖の如くに展開せるやうである。彼はいふ、『予は常に人と祖先との關係に、祖先が靈と肉との上に及ぼす神秘的の影響に、深甚の興味を感じた。科學の測り得ざる所のものを詩人は企て得る』と、彼は一つの家族が獨逸史の決定的事件に關係しなければならぬやうな計畫を立てた。一八七二年に出た『祖先』の第一話は羅馬禍の際に於けるインゴアの運命を述べ、第二話はスラヴ人の東部侵入とポニファキウスの到來を述べ、第三・四話は騎士道の興廢を描いてゐる。第五話は宗教改革に話を進め、波蘭の治下にあり乍ら、感情に於ては獨逸的なる、トルン市の一商人の生活に、之を映寫してゐる。第六話は三十年戰役を、第七話はフリードリヒ・ウィルヘルム一世の治世を描き、最後の第八話は自由戰役を述べ、己が一家に關聯せる事項を書き込んでゐる、この家族の最後

の一員なる彼、即ち戰勝王は一八四八年に記者となつた。フライタハは其著を、八部をなす合奏曲であると述べてゐるが、併し個人は時代の繼承者として示されたるも、彼は連綿たる傳統の鎖によつて、決して制限も拘束もされなかつた、祖先は靈感であつて重荷ではなかつた。獨逸戰役後の數年間、盛に耽讀せられた『祖先』は、過去の記憶を鮮かに傳へた。本書はシラーの戯曲『ワールンシュタイン』が『三十年戰役』より生れ出でたると同じく、詩的描寫として『面影』に代はるべきものである。兩書は共に他の何人の記述にも優て、全世界の獨逸人に、自己の歴史に對する興味を與へたのである。

リールとフライタハとが、獨逸民族の運命に精力を傾注したるに反して、濟輩を抜けるブルクハルトは、寧ろ精神生活に注意を拂つた。彼の主題は思想と行爲、宗教と藝術、學問と思辨、

換言すれば精神的及び道徳なる過去の空氣の複寫であつた。リールの農民に於けるが如く、彼は精華を愛好した。共に歴史の範圍の擴張に貢獻したるも、リールが自國の事のみを記し、殆ど國外に知られなかつたに反し、彼の視界は文化の全局を蔽ひ、彼の名聲は諸國にて傳はつた。彼は郷里バーゼルにて神學を學びたる後、間もなく歴史の研究に移り、伯林大學にベック、ヤコブ・グリュム及びランケの講義を聞きたるが、最も注意を引きたるは、其頃出版を初めつゝあつた『藝術史』の著者、フランツ・クグラードであつた。彼は二十才の頃、既に瑞西の寺院につきて著述し、ボン大學に入りては、ラインの教會について記した。一八四四年に、バーゼル大學の歴史及び藝術の講師に任命せられ、其後半世紀間、彼の講堂は熱心なる聽講者を以て充した。一八七四年クグラードの求に應じて、『繪畫便覽』を編

述し、自己の蒐集せし資料の多くを挿入した。

ブルクハルトの努力は、是迄主として藝術の世界に於てあつたが、注目すべき最初の作は、彼が文化の他の方面にも、炯眼を具へてゐる事を示した。一八四二年彼は記して曰く、『予は背景に重きを置く、こは予が一身を捧げんとする、文明史によつて充される』と。一八五二年出版の『コンスタンチヌス大帝時代』は、急激なる過渡期の特徴を掴む事を目的とした。彼は講義のノートを作らんがために第四世紀を研究して、一般にその周圍を無視せる事に驚かされた。彼は主たる特質が不安の状態であり、主たる傾向が新奇の憧憬である一時期の心理を描寫せんことを欲した。彼は舊世界に於て腐朽し醜醉して基督教のために道を開ける要素を評したるも、コ帝を純然たる世俗の野心に動かされた、機略に富める實際家であるとした。コ帝の信仰は神秘

である。唱ふる論者に對して、さることなしと答へたるのみか、基督教は公の宗教となるや忽に墮落し、立派な人士は禁欲生活と修道院に隱家を求めた。而して彼は舊世界は蠻人や基督教によつて破壊されたるにあらで自ら倒れたのであると結んでゐる。一躍して彼を一流の史家に加へた本書は、學者の歓迎を受け、デルツェルの如きビザンチウム史の眞摯なる研究者を出さしめしも、決して民衆の人氣を博さなかつた。

彼が最初の熱烈なる嗜好は藝術であつた。彼は『コ帝時代』の完成後、曾て一遊したることある伊太利に一年有餘を送り、其の結果『チチエローネ』と稱する伊太利美術案内をかいた。本書はクグラー及び他の藝術史家より盛なる賞讃を博したるも、伊太利旅行に巨額の經費を要せし當時の事として、多年の間賣行が悪かつたが、他人の改訂を経る新版は旅行者の手引とも哲學者

級、團體、家族の一員であり、社會には階級制度

が行はれ、傳統が至高の威力を揮つてゐた。文藝復興と共に人は自覺し個性を發揮することゝなつた。一千年の桎梏は破られ自己の表出は終局の目標となり、世界と人に對する新しき評價が行はるゝやうになつた。皇帝フリードリヒ二世型の異彩を放てる人物は中世には一二回しか見られなかつたが、完全なる人は爰に活動の、思想の、そして藝術の世界に於て、遍く見られることゝなつた。『第十五世紀は殊に多藝多能の人材の世紀である。』是等の驚異すべき人間の苗が生長したる土地は、都市的國家の感激し易き生活、上古の藝術と哲學の復活、權威の衰頹、信仰の分裂などの夥多の要素から出來てゐた。僭君と傭兵の隊長とは非道の振舞ありしも、尚ほ大型に鑄込まれた政治的藝術家であつた。勝れた貴婦人達は前後婦人に見たることなき光彩

を放つた。

ブルクハルトは中世に宗教改革の間に閃ける光彩に、迷はさるべくもなかつた。本書の終をなせる道徳と宗教についての緻密なる分析は、當代の汚點となれる無限の懷疑と並存せる非常なる迷信、粗暴と獸慾性を隠蔽せんと、企てなかつた。彼はケーザル・ホルシアとシギスモン・ト・マラテスタに於て『私心なき罪惡の寵愛』に驚かされたるも、上流階級の特質たる徹底的罪惡。即ち憚る處なき個人主義が、同時に其の雄大をなせる條件となれることを理會した。『復興期の伊人は新時代劈頭の巨濤に耐へねばならなかつた。かれ伊人は天稟と情熱によつて當代の至高至深の特性を示すべき代表者となつた。』自立てる缺陷あるにも拘らず、文藝復興は近世の春であつた。彼の傑作は歴史文學中の最も獨創に富める著述の一であつた。多數の讀者は藝術を

逸せることを遺憾とした。而してテインは、吾人は之を逸せるに非ず、吾人は藝術家としての人よりも、人としての人に、一層多くの興味を有するなればと辯じたるも、こは文明の通査を不完全にした、又中世の朦朧より文藝復興期の目眩き飾光に至る推移の早きを誇張してゐること非難するものがある。復興期の文書に對する彼の知識は廣汎であつたが、中世には徹底しなかつた。或る評者は復興期に對する彼の觀察は餘りに阿諛的であるとし、又政治に關する評論は不十分であるとの評もある。最近の最も峻烈なる評者は文藝復興が如何にして始まり、如何にして發展したるかの説明を缺き、伊太利文化の物質的基礎を見落し、且つ作者に對する彼の通査は、世代の前後を混同せりと歎するも、是等の批評は『文書に存する文明史中の、最も徹底的にして、且つ最も精巧なる論文』とアクトン卿

の讃辭を得たる、本書の名聲を知らざるものもある。

爾來四十年の長壽を全うしたる彼は、他の著述を出さなかつた。彼は講義に無限の苦心を積んだ。其の該博なる知識と獨創とはニーチェや其他の聽講者の知る處である。彼は老史家ランケの退隱に際し、阿諛的に提供されたる伯林大學に於ける講座を峻拒した。其の晩年の主たる仕事は、その講義を基礎として、ギリシヤ文明の百科辭書的通査であつた。一八九七年臨終の際、二卷は夙に脱稿し、他の二卷は門弟の手によつて出版の準備中であつた。彼は一八六八年古學の精神につき教案を立て數年の間屢ギリシヤについて講述し、聽講者に迫られて之を手記したるも、出版すべく餘りに不完全であるとの信念を打破することが出來ず、臨終に及んで漸く其の許可を與へたのであつた。故に本書の不完全

と専門家よりする酷評に對しては右の事情を記臆せねばならぬ。

右の『ギリシヤ文明史』は詳細に亘り且つ包括的なる通査である。彼は『最高の文化は權力によつて安固となれる處に起り得るのみ』と説き乍ら、尙ほ文化と政治を結び付けず、天才の至高の權威を認め、殊に藝術は國家の微弱なるときに繁榮し得べきを認めた。宗教には全一巻を充て、第三卷は藝術と文學、科學と哲學を論じたるも、第四卷はホームーよりパウサニアスに至る、ギリシヤ個性の連續的發展を説き、ギリシヤ世界の理想化を拒んだ。彼が専門家ならざりしことと、他の方面にて鍛へたる見識を具へて、晩年ギリシヤに旅行せることの事實は、本書に異常なる活氣を加へた。其の描寫の際立てる特徴は、影の濃きことである。曾て文藝復興に眩耀せりとの非難を受けた彼は、希臘に眩惑する

ことはなかつた。彼は殘忍と狹量、奴隸制度の汚點を説いた。ブルクハルトは内的生活をば、その表出の條件なる形式や制度などの外界よりも重じた。テインの熱情をそゝりたるは、時代精神に徹底し、難問を看破する彼の力であつた。彼は又頗る個人的であつて、決して一派を立つることがなかつた。併し一時期或は一民族の心理を解釋せんと企てたる史家にして、彼の流を汲まざるものが、何處にあるであらうか。

ゲゼルの「自由經濟論」

園 乾 治

此の一篇は The Nineteenth Century And After, No. 520, June 1920 所載の Free-Economy: an Alternative to Capitalism and Socialism. By Philip Pye を譯述したるものである。資本主義及び社會主義に代るこの新學説は、一部